

時間関係を表す「やさき」の成立

藤田優子

「やさき」は、「やさき」が構成する句に表される事態（前件）と、その後続句に表される事態（後件）とが時間的に近接して成立することを表す形式である。近接した先後関係を表す形式の多くは、「帰るまぎわに雨が止んだ」や「帰るやいなや雨が止んだ」のように、直前か直後かどちらか一方のみを表すが、「やさき」は、「商売を始める矢先に事故が起きた」や、「調査が始まった矢先に事故が起きた」のように、ル形・タ形で直前・直後を表しわけ。このような「やさき」に特有の時間的意味を、成立過程を辿ることによって説明することが、本発表の目的である。

まず、「矢の先端」という具体的な物の部分の意味から、中世までに「矢の向かう先（＝方向）」という空間的意味が生まれる。そして近世に入り、連体節をうけ句を構成するようになり、前件と後件の時間関係を表すようになった。

(1) いつそあきらめにもならふかと思ふやさきへ、似た人の聲がしてさへ、思ひ出す心がたへねへ今日このごろ。

「春色辰巳園」初編卷之 2

前件述語をみると、近世には前件述語にル形で継続中を表す思考・感情の動詞が現れる。近代にはテイル形で継続中を表す述語が多くなり、動詞の種類が増える。この時、表される時間的意味は、前件の継続中に後件の発生が位置づけられるという部分的な同時性である。後件が位置づけられる位置は、前件の継続中の期間の任意の時点ではなく、「矢の向かう先」という空間的意味を反映して、事態の限界達成の時点を捉える。

(2) 英國及米國の如き其商業上の競争國が何時にても正金引換に應ずる矢先に斯る姑息手段を採り、

雑誌「太陽」1901年1号

1900年以降、前件述語・後件述語ともに完成相の例が現れる。(2)の前件・後件は時間的な重なりはないが、近接している。このような時間関係は、近接した二つの事態が同一時間帯に起こることを捉える接触的同時性といえる。